
ちょっと自分の欲求を満たすためにあちこちの世界に行ってきます

らいち2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつと自分の欲求を満たすためにあちこちの世界に行ってきます

【Nコード】

N1199BA

【作者名】

らいち2

【あらすじ】

ええ、タイトル通りですよ。私が欲求を満たすためにいろんな世界に行ってくるのです。何故、そんなことをするのにいろんな世界を移動するのかって？作者がその方がいいと考えているからですよ。まあ、それが本心なのか私にはわかりませんがね

これ一応ブログなんですよ

「いや、それにしても暇ですね」

「そう言いながらくつろぐのはどうかと僕は思うよ」

「別に構わないじゃないですか。それに、そんなことを言ったらあなたも同じことが言えますよねじみさん」

「おいおい、そんなことを言っちゃうと僕が誰なのか読者の皆にわかつちやうだろう。それに僕のことは親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「丁寧に断ります。それと、別にいいじゃないですか、減るものじゃないです。と言うか、なじみさんってそんなことを気にするような人でしたっけ？って、この場合人ってことでいいのでしょうか？」

「人でも人外でも好きな方を取ってくれと僕としても嬉しいよ。そうだね、この作者が書いている安心院なじみ（僕）はそんな風になっているようだね。まったく、自分の意志で好きなことを自由に言えないから困ったものだよ」

「そうですか？私はあまり気になりませんが」

「君は別だよ。なんだって君は存在そのものがあまりにも異常なんだから」

「……………なじみさんがそう言ってもあまり説得力ないですよ？」

「まあ、確かに悪平等ノットイコールと自負している僕がそう言ったら信用できないのは無理はないね。でも、これは疑うのが愚かしいと思ってしまうほどの事実なんだぜ。そのことは君がよく知っているはずだよ」

「いや、確かにそうですけどいきなり最初っからそんなことを言うてしまうのもなんだかなあと思ってしまうんですね」

「おいおい、そんなことを君は気にしていたのかい？多少の主人公の設定を紹介するのは当たり前のことだろう？」

「いやいやいや、これ多少どころじゃないですって。もろに設定の核心に繋がることを紹介しちゃっているじゃないですか」

「だから？別に困ることでもないだろ。だって、そんなことがばれたとしても君と言う存在が変わるわけじゃないんだからさ。それ

に、これぐらいのことできなり全部を知られたとしてもそれが絶対に正しいとは限れないんだから」

「……………いや、うん。あの、言っている傍から思いつきり言っちゃっているんですけどもしかしてわざとですか？」

「ナンノコトカナ」

「それは認めたと受け取っていいのでしょうか。いいんですね、ありがとうございます。お礼に、あなたのスキルを1つ奪うことにします。もちろん、キスで」

「準備はいつでもオツケーだよ！さあ、早く僕の胸に飛び込んでおいで！」

「と、思いましたがやめます。と言うか、キスは冗談だったんですけどね。そして、どこに胸に飛び込む要素があったんですか？」

「うう、よくも僕の純粋な乙女心を弄んでそれはないよ君」

「なじみさんが乙女心ってなんか嘘くさく感じる、ってなじみさんて誰でもあるんじゃないかなかったですか？」

「そうだけど？」

「それじゃあなじみさんが女の子かどうかなんてわからないじゃないですか」

「ええ、君それ本気で言っているのかい？どこからどう見ても美しい少女でしょ？」

「どこからどう見ても少女なのかわからない女性ですね、あがとうございます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オコルヨ？」

「冗談ですから、そのどこからか出した刀を喉に突きつけるのをやめてください」

「うん、よろしい。なんて、言っと思ったのかい？」

「デスヨネー」

（30分後）

「何も30分もやる必要はなかったと思うんですが」

「そうかい？本当は永遠とやるつもりだったんだけどね、この小説の作者が早く物語を進めたいって我儘を言ってるさ。しょうがなく30分で済ますことになっちゃったんだよ。それに、そう言っている割には平気じゃないか君」

「まあ、こんなことで終わられてしまうほど軟じゃないですしね。それにしても、本当にこの作者は我儘ですね。自分でここまで引き延ばしているのにいきなり早くしろだなんて我儘にもしうがあるってものがあるんじゃないですか」

「別にいいんじゃないかな。だって、そう思っていることは人間だと言う何よりの証だろ。それは大切なものでもあるしね。まあ、そんなことも僕にとってしまえばどうでもいいことだがな」

「それに関しては同意見ですけどね。正直今は興味もありませんし。時間が経てば興味が湧いてくるかもしれないけど」

「相変わらずの言い方だね君は。それで、これから君はどうする気だい？ま、どちらにしても作者の思い通りにしか動けないと思うけどね」

「そうですね、ちょっと欲求不満と言いますが、やってみたいこととかあるんですよ。なので、それを実現しつつ作者が望んでいる物語を進ませていくとしますよ。ああ、それとなじみさん」

「なんだい？」

「1つ間違っている点がありますよ。確かに私は作者の思い通りにしか動けないかと思えます。しかし、

その作者は私の思い通りに動いているとも言えるんですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「言いたいことはそれだけです。それでは次に会う時までお元気で
ああ、それと少しでもいいですから台詞以外のことを書いた方がいい
ですよ。台詞だけだとほぼ漫画に近いですしね。まあ、それでい
いのならそれで構いませんが」

そう言つて、まるでそこに初めからいなかったかのように消えた主
人公。そして、その場に1人取り残された安心院なじみは笑みを浮
かべながらこう言つた。

「ふふ、まったく君つてやつは本当に飽きさせてくれないね。そん
なのノーマルじゃない奴が聞いても意味が分からないって思われる
だろうに。でも、それが君つて言う存在なんだけどね。だからこそ
君には『フラスコ計画』を手伝つてほしいと思つていたんだけどな
まあ、構わないか。君が何をどう考えどう行動して、どんな結果に
なるかなんて予測することはできてもそれが君の答えだと予測する
ことはできないしね」

さて、記念すべき一話目ですがどうしましょう

さて、どうしましょうか。

え？タイトルと同じことを言っている？

あなた方がどう思うが勝手ですが、そう言うことは私ではなくこの小説に作者に言うてください。

それができないなら言わないでください。聞いていてイラストくるので。まあ、それを信じるかはどうかはあなた方次第ですけどね。

紛らわしい？しょうがないでしょ。それが私のキャラと言うものですから。

で、本題に戻るわけですが、本当にどうしましょうか。

前回ああは言ったもののやることがまだ決まっていないます。

具体的に言つといたいたいどこの世界に行くのか決めていないんですよ。

まったく、この作者は計画性と言ったものが本当にありせんね。この小説を書く前にも何作かあげていたそうですが、そのどれもが途中で行き詰って中途半端に終わらせているんですよ。

その度に、『次こそは頑張ります』って言うてんですよ。もう本当に笑っちゃいますよ。実際この小説もそんな感じで始めたらしいですけど正直不安しかありませんよ。

あ、でもそれはそれでわたしやなじみさん達が自由になりますからいいかもしれませんね。

つと、また話がそれてしまいましたね。すみませんね、どうやらこの作者は話をそらすことが得意らしいですね。それはそれで困りますが。

おっと、また話がそれてしまつところでした。やれやれ、気を付けないといけませんね。まあ、最終的に作者が決めてしまいますからあまり意味はありませんが。

で、もう一回本題に戻るわけですがこれから先どうすればいいのでしょうか。

ねえ、作者さん。私はこれからいつたいどうすればいいんですか。
え？『私に聞かないでくれ』ですって？

・・・・・・・・・・・・・・・・存在ごと消し去ってやろうかヒューマン。自分が設定を好き勝手変えられるからって調子に乗ってんじゃねーぞ。

おっと、つい乱暴な口調になってしまいました。なじみさんの影響ですかね。次に会ったときは訴えましようかね。

『それはないぜ君』

おや？なじみさんの声が聞こえてきました。おかしいですね、ここにはいないはずなのに。私も幻聴が聞こえてくるようになってしまいましたか。おお、やばいやばい。

つと、そんなことを言っている場合じゃありません。まずはこの先何をするかを決めませんと。

ああ、そう言えば今私がどこにいるか教えていませんでしたね。これは失礼しました。

私は今神の間と呼ばれている場所にいます。どう言った場所かと言いますと、その名が示す通り神がいる場所です。それも大勢の神がいます。その神達が何をしているかと言えば下の世界、すなわち地球が存在しているまたはしていた世界を管理しています。具体的に何を管理しているか説明すると長くなってしまうので、簡単に言えば魂の管理をしていると言えいいでしょう。

では、なぜそのような場所に私がいるのかと言いますと、ここなら何かと都合がいいと思ったからです。

先ほども言いましたが、この場所はいくつかの世界を管理しています。つまり、その世界の情報が嫌と言うほどあるのです。情報と言うのはいつになっても大切なものです。時に偽情報と言うものもありますが、それでもあるのとないのでは状況も驚くほど変わるものなんですよ。

このことから私はこの場所に来たと言う訳です。でも、本音を言ってしまうと別に来る理由はなかったんですね。そんなことをしなくても私はわかることができますから。

では、なぜこのような場所に来てしまったのかと言いますと、ぶっちゃけなんとなく来てみたかっただけなんです。

さっき言った理由はあくまで建前だったんです。それならはっきりとそう言えいいじゃないかと思えますよね？でも、いきなりそん

なことを言ったとしてもあなたはすぐに理解できますか？中には詳しく知りたがる人もいるかもしれませんが、なので、多少面倒でも建前から説明したわけなんです。

さて、話も長くなってしまいました。さぞ読者の皆さんも飽き飽きしているでしょう。そんな皆さんのために今回の話を早く進めることにします。いえいえ、これはあくまで私の勝手な善意でやることですから気にする必要はありませんよ。まあ、人によっては不快感を覚えるかと思いますがご了承ください。

「と、言う訳でどこか面白いところありませんか？」

そう言つて、私はちょうど近くにいた神に聞きました。

「え？いや、いきなりそんなことを聞かれました。と言うか、あなた誰なんですか？見たところ人間と言う感じもしませんし」

「その質問に答えても構いませんが今はそんな悠長にしている気もありません。なので、あなたは私の質問に答えるだけで結構です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちよつと待つてください。他の神達にも連絡を取りますので。私もそこまで詳しく知ってはいないので」

「そうですか。それでは仕方ありませんね」

そう言つて、しばらく待つことになりました。ま、いいですか。こういうことに付き合うのも面白いですしね。

そうして、思つていたら案の定と言いますかお偉いさん方の神達が私を囲むように現れました。その中でリーダー格と思われる神が私にこう言いました。

「貴様か。我々神の領域に無断で侵入し、挙句の果てに命令したと言つのは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええそうですが、それが何か？」

「何か、だと？これはおかしいことを言うな貴様。人間ではないのはすでに聞いてはいるがいくらなんでも傲慢が過ぎるぞ。それともなんだ？神に勝てるでも言つのか貴様」

リーダー格の神がそう言つと周りの神達が一斉に笑い出し、さまざまなことを言い出しました。

「おいおい、それはないだろう」「ありえるわけがない」「もし、そうだとしたら見せてもらいたいものだ」「人間じゃないからつて

勝った気になるなんて本当に阿呆としか言いようがない」「おい、そんなことを言うなよ、それじゃあ人間と変わらないじゃないか」「いや、もしかしたら人間と同じかもしれないぞ」「ハハハ、そうかもな」

「……………と、言う訳だ。はっきり言うが我らは貴様に命令される道理はない。そして、貴様を見逃す気もしない。これがどういう意味かわかるよな？」

「……………そうですね、その問いに対する答えとしては、わかるともわからないとも言える、とお答えします。ですが、その前にあなた方は1つ間違いを犯しています」

「……………何だと？我らが何を間違えたと言うのだ」

「わかりませんか？あなた方は私の頼みを命令と履き違えていると言うことですよ。私はあくまで『面白いところはないか』と尋ねただけなんですから」

「そうか。それは悪かったな。だが、例えそうだとしても聞いてやることはできないな」

「なぜですか？できれば理由を教えてください」

私がそう言つと、今度はバカにした笑い声がリーダー格の神も含めて聞こえてきました。そして、その中の一人がこう言いました。

「わからないか？だとしたら、教えて……やるわけないだろうこの無能で愚かで阿呆な下の世界の者が……！」

そう言つると同時に神達は私に襲い掛かりました。この状態を一言で言つてしまえばリンチです。当然、私はその言葉通りに現在進行形でやられています。

ある者は殴り、ある者は剣で刺し、ある者は槍で突き、ある者は魔法や弾幕などの方法で攻撃したり、またある者は私の存在を消したりするなどといったことでした。

そして、その度に私は何事もなかったか状態になりました。それを何回も見えていたからでしょうか。次第に向こうは勢いがなくなつていき、恐怖の感情を感じるようになりました。それを代表するかのようにリーダー格の神がこう言いました。

「お、お前はいつたい何者なんだ！？なんでこんなにやっているのになんともないんだ！？」

「その質問に対しての答えはもうすでに言っていますよ。最初に言

ったでしょう？あなた方はただ私の質問に答えるだけで結構ですって。わかったならやるべきことをやって下さい。正直こっちも待つのはそこまで好きじゃないんですから」

「わ、わかった。わかったから、怒らないでくれ。頼む」

「別に怒ってはいませんよ。それと、怒らせたくない为本気で思っているなら早くすべきだと思いますよ」

「あ、ああそうだな。おい、お前らなんか面白いところはないのか」

「いや、そう言われなくても……あ！あれなんかどうですか？ほら、この前50人の死んだ人間達にいろんな特典を付けて転生した世界とかはどうですかね」

「あの世界か？だが、あれは我らの数少ない娯楽の1つだしなあ」

「別にあなた方の都合なんてどうでもいいので教えてくれませんかねその世界について」

「あ、ああ。その世界はあるアニメの世界の平行世界の1つだ。で、先ほどその者が言った通り我らが死んだ人間達を特典付きで転生させたのだ。そして、いったい誰が生き残ることができるのか賭け

をしている真っ最中ってわけだ。っと、話がそれってしまったな。で、その世界が何のアニメの世界なのかについてだが」

「ああ、別に言わなくてもいいですよ。もうとっくにわかっていますし」

「そ、そうなのか？だとしたらなぜわざわざ我らに言わせたんだ？」

「何故って、だって何も聞かないで話を進めると読者の皆さんがわからないかもしれないじゃないですか。わかりましたか？さて、そんな訳で余計なことをあなた方にさせてしまいましたので謝罪の気持ちとしてあなた方にお礼としてあるものをあげるとします」

「？あるもの？」

「はい。と、言う訳でありがたく受け取ってくださいゴット共」

そう言うのと同時に、グチャ、と言う音がしました。そして、そこから真っ赤な水が大量に噴出しました。それを見たゴット達は恐怖の感情に煽られて逃げ出したり、あるいは縮こまって震えたりしました。

「そんなに嫌がらなくても大丈夫ですよ。ちゃんと皆さんには必ず

受け取って貰いますから」

そう言つて、私はゴット達に死を残さず送りました。そして、2分
かかってしまいましたを送り届けることができました。

え？なんかキャラ変わってないかって？しょうがないでしょ、そ
うなるように作者が書いているんですから。

まあ、そんなことはこの際どうでもいいことにします。

「さてと、それでは行くとしますが、その世界に」

あ、ちなみにあの神達を殺した理由ですがなんとなくむかついたか
らですよ。あの高圧的な態度がなんか癪に障ったんですよ。しか
も、あれだけ高圧的だったからちよつとやそつとではやられないか
なと期待していたんですが、見事にその期待を裏切られましたよ。

あれじゃあ、なじみさんには及ばないですね。あれ？考えてみたら
及ぶとも及ばないとも言えるんじゃないんですかね。まあ、いいで
すか。

さて、次回ですがまあ間違はなく異世界に行きますね。そこで何を
するかはまだ決めていませんのであなたの方が決めてもらっても結構

ですよ。まあ、それを作者が採用するかどうかはわかりませんが。

最近の転生者ってこんな感じなのでしょうか？

はい、皆さんこんにちは。この小説の主人公です。

え？私の名前がなんなのかわからない？当たり前ですよ、言ってもいませんし。

それに、例え言ったとしてもそれは今こうしてここにいる私を指す名前ではありません。それでもいいと言うのなら今回は特別ってわけでもありませんが言いましょう。

私の名前は全存^{ぜんそん} 有無^{いうむ}と言います。なんか厨二病っぽいと思ったあなたは間違いなく気のせいではありません。でも、私はあまり気にしません。何故かって？だって、なじみさんがいる世界もだいだいそんな感じの名前の人が多いじゃありませんか。だから、今更一人や二人増えたところで何の問題もないと私は思います。うん、それでOKだな。

さて、ちょっと遅れ気味になった自己紹介を終わりにして本題に入ろうかと思えます。と言うか、入ります。

前回の話を読んでいた方ならだいたいわかっているかと思いますが、今私はあるアニメの世界にいます。正確にはその平行世界です。

で、私がここに来て何をするかと言えば・・・・・・・・・・何
でしょうかね？

あ、今ズッコケませんでしたか？でも、いつでもってわけではありませんが私は真剣です。ええ、本当に何をするのか決まってい
ないのです。そもそも、こうなったのは全て作者の所為なんです。です
から、私は悪くはないはずです。

『いくらなんでも酷くないか？』

はっはっは、これは面白いことを言いますね作者さん。なんならあ
なたの恥ずかしい過去や実際の名前を言っても構いませんよ？

『お願いですからやめてください』

はいはい、わかりましたよ。今回の私は寛大深いですからそれぐら
いのことは許しますよ。まあ、次はどうなるかはわかりませんが。

って、また本題からそれてしまいまたよ。どうしてくれるんですか。
知らない？そんな言い訳が通じるとでも。

まあ、そんなことは今はどうでもいいとして早速ですが行動を開始

したいと思います。基本的には中立ポジションをとって行きたいな
と思っています。言ってしまうばなじみさんポジションです。なの
で、パクリだろーと思う方もいるかと思いますがこの際無視するこ
とにします。

『ええー。前回に続きそれはないぜ君』

おや？また幻聴が聞こえてきました。私も歳なんでしょうか。と言
つても、私に年齢と言った存在はないんですけどね。別になくても
存在することはできますしね。

あ、1つ言い忘れてたことがありました。私が今回やってきたこの
アニメの世界なんですが名前は『リリカルなのは』と言うらしいん
です。聞いた限りだといかにも魔法少女っぽいですね。でも、正直
そういうものって私あまり好きじゃないんですよ。嫌いでもあり
ませんけど。

そんなことを考えていたらいくつかの殺気を感じました。アニメ兼
原作の時間軸で言うと、確かユーノと言うフェレットでもあり人間
でもある存在でしたっけ？がちょうど襲われている時ですかね。で、
その後この物語の主人公であるのはと遭遇して最終的に魔法少
女になるんですよね。

でも、それならちょっとおかしいですね。だって、殺気とともに感
じることが出来る力量が明らかにそこらの雑魚キャラよりも超えて

いますし、何より、その襲っていると思われる者の数がさきほども言いました通り複数認識できます。

原作にはない展開。そして、あまりにも大きすぎる力。これらから考えられることはいくつかありますが、転生者という可能性は十分にあるでしょう。

では、どうするか？今の私には大きく分けて3つの選択肢があります。1つ目はユーノを助けて、原作通りに進ませる。それも悪くはありませんね。しかし、それだとある程度まで協力する羽目になってしまうので面倒になってしまうというデメリットもあります。

2つ目はあえて転生者に協力する。それはそれで面白そうですが、何だか勝手に自爆してしまいそうな感じがします。

3つ目は最初の通り中立を保つ。これなら大抵のことなら自由にやることが出来ますのでいいかもしれません。ただ、いかにして敵対関係にさせないかが問題になりますね。

うーむ、どうしようかねえ。個人的には3つ目がいいんですが、面白さ的に言うと1つ目か2つ目の方がいいですね。でも、それだと面倒事も増えますし。

うーん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・別

に原作を守る必要はありませんよね？と言っか、原作なんてそれが
そうだと認識してしまえばいくらでもできますから別に構いません
よね。

となると、あんなこともできると言っ訳ですね。あ、やばいこれ面
白そうかも。

そう考えていると、自然に笑みがこぼれます。別に構いませんよね
？本来あつた原作の面影をなくしてしまつても。

そして、私は現場に向かいました。あ、現場と言つのはさきほど言
つたユーノが襲われている場所ですよ？え、知っている？それはす
みませんね、作者がどうしても言つので仕方がなく言つてしま
つたんで。

まあ、そんなことは置いといて、現場に到着しました。早い？だつ
て、一瞬で移動したんですから。

さて、現状を確認しましょうかね。

ぼろぼろのユーノを転生者かと思われる5人が襲っている。はい、
終わり。短すぎる？長く言っより簡潔に言つたほうがなんとなくわ
かると言っものでしょ。

で、今まさにユーノの命が果てようとしているんですが別にいいですね。後で、生き返らせることもできますし。

しかし、誰も私に気付いてくれません。悲しいです。そりゃいきなり5人の背後の出現しましたから仕方がないですけどユーノも気づかないってどうなんですか。私は影が薄いと言うんですか。

腹が立つたので近くにいた1人の首から上を消し飛ばしました。他の人達が気づいたようですがそんなことはどうでもいい。同じように他の4人の首から上を消し飛ばしました。

.....あ、しまった。これではいかにも暗殺者みたいじゃないですか。このままだと私は暗殺者もしくはアサシンなんて呼ばれてしまう.....！早くこいつらを復活させないと。

『アサシン（笑）』

また幻聴が聞こえた気がしましたが今はかまっている暇はありません。とりあえずすぐに活動できる状態に復活させます。

と、言っているうちに終わってましたけどね。正確には『復活させない』と思っただ次の瞬間に終わりました。

「・・・・・・・・おい、今何が起きた？」

「え、いや俺もわからないんだが。と言うか、お前さっき首から上がなくなっていなかったか？」

「それを言うならお前もだろ？」

「いやお前もそうだろう？」

「ていうか、さっき俺ら死んでいなかったか？確かに不死に力を俺らは持っているから復活したかもしれないが、いくらなんでも早すぎね？」

「そうですか？と言うか、不死だったんですねあなたたち。普通に殺せましたけど」

「「「「「！？」「「「「」

「お、お前、誰だ！？いつからそこに、いや、お前なのかさっきやったのは」

「ええ、まあその通りですが、それが何か？」

「何か？じゃねーよ！何が目的であんなことをすんだお前！後、少してユーノを亡き者にできたのによお！！」

ああ、ちなみに彼が言っている通りユーノには病院に戻しておきました。その際にちよつと記憶を消しましたが。もちろん主人公であるのはも記憶を消して、自宅に帰るようにさせました。

「こうなつたらお前を代わりに殺すことにするか」

「いやいやいや、なんでそうなるんですか？いくらなんでも沸点が低いですよ。そんなにあのユーノを殺せなかったのが気に食わなかったんですか？」

「気に食わねえも何ももしあそこで殺せたら、俺らがハーレムエンドを迎えられるはずだったんだよ！それをお前は邪魔しやがつて。見たところ俺らと同じ転生者らしいが生きていられると思っていないだろうなあ」

あ、そう言えばもう一つ言っていないことがありました。今私の前で怒りを露わにしている5人ですが、正確には5人の子供です。それどれもが銀髪か金髪のオッドアイ。

これはこれで随分とすごいメンツですね。恐らく、ヒロインの誰かを簡単におとせるようそんな風にしたんだと思いますが、はっきり言ってそんなの軽い誘惑にしかありませんね。この人達の知能を疑いますよ、本当に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・言っただてめえ。もういい、ぶち殺す!!」

そう言つて、襲い掛かってくる5人。傍から見ると子供が大人を襲っているように見えます。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ、なんでこつちも最近会っている者達と同じ行動を取るんでしょうか」

呆れながらも、私は5人が襲い掛かってくる前に道路に叩き付けました。その衝撃で

道路が激しく損傷しましたが、別に構いません。後で、直しますし。

「な、何が起きたんだ？何で俺ら道路に叩き付けられているんだ？」

「おや？もう傷が治っているのですか。どうやら不死というものも嘘ではなかったようですね」

私がそう言つと、その人は笑みを浮かべこう言いながら立ち上がりました。

「へっ、わかつたか。わかつたならおとなしく」

「殺せばいいんですね。わかります」

そう言つて、立ち上がっている最中に体を縦で2つに分けました。そこから大量に血が飛び散りましたが関係ありません。そして、それはそのまま生き返ることはありませんでした。

「な、なんで死んでいるんだよ！？俺達是不死の力を持っているんだぞ！？」

「おやおや、あなた方は随分とおかしいことを言いますね。不死と言つのも所詮その状態を表す名称にしかすぎません。つまり、あなた方がその状態じゃなかっただけ、と言ふことだったわけですよ」

「く、くそ。ならこいつならどうだ！」

そう言つた瞬間に胸に槍が刺さっていました。恐らく、必殺系の槍

なのでしょうか。でも、まあ

「こんなの大したことなんですけどね。とりあえず、お礼として私もあげますね」

そう言っつて、私は彼にこれでもかと言うほどの槍を刺してやりました。悲鳴を上げる前に死んでしまいました。が別にいいですね。

それを見て、他の3人も恐怖を露わにし、逃げ出そうとしますが体が動かず、まだ道路と肌を合わせている状態です。まあ、私がそのようにさせているんですけど。

「と、言う訳で残った3人も逝ってください」

ブチツと音とともに彼らの体は初めは四肢から、その後は頭、そして最後には肉が肉眼で見えなくなってしまうほど引きちぎられました。

跡には、大量の血と損傷を起こした道路が残りましたので何事もなかったかのようにそれらを消し去りました。

しかし、今回は彼らはラッキーかも知れません。何故なら、今回の私は寛大だからです。なので、跡を消し去った後、彼らをもう一度

復活させました。もちろん死ぬ前の状態に戻しました。

ただ、彼らは復活した後、やけに私のことを恐れていたんですがね。まあ、こればかりは事項自得ですけどね。いつそのこと記憶や心を改ざんさせようかと思いましたが、それだとあまり面白くないのでやりませんでした。

そして、私はまだおびえ続けている彼らを背に歩き始めました。

え？どこに向かうんだって？どこでもいいでしょ。なんならあなた方が考えますか？今なら、作者に何を言ってもいいかと思えますよ。もしかしたら、その通りになるかもしれないし。

それでは、また次回にお会いしましょう。

予想外とはこのことを言うんですね

はい、皆さんこんにちは、もしくはこんばんは全存有無です。え？読みも一緒に書いて欲しい？そうしたいのはやまやまではありませんので諦めてください。どうしてもと言う方は2話目を参照にしてください。ちなみにこれは3話目です。

で、早速ですが前回までのあらすじといきましょう。

前回リリカルなのはの世界に来た私こと全存有無は思考内討論をした結果、原作じゃない展開にするべく行動を開始。その手始めにユーノの傷を治し、記憶を少しいじって何事もなかったかのようにしました。その際に転生者と思われる5人に襲撃されましたが、逆にコテンパンにしてあげました。

以上、前回までのあらすじでした。

.....事実と少し違う？ハハハ、何を言っているんですか。まさに事実通りじゃないですか。ただ、少し簡潔にまとめてしまいましたので行数が3行になってしまいました。が別に構いませんよね。

さて、そんなわけで今回も行動しようかなと思っています。ちなみに時間軸で言うと、前回ユーノが襲われてから2日が経っています。

昨日は何もせずに様子見をしていました。そしたら、案の定言うべきでしょうか原作からかなり外れ始めています。まず何と云って主人公のなのは魔法少女になっていません。これだけでも物語は大きく変わっています。そして、ユーノも傷が完治しているため昨日からすでにジュエルシードを自力で集め始めています。これでは魔法少女になる理由は1つ消えました。

なぜ1つかと言いますと、まだいるであろう転生者がなんらかの方法でなのは魔法少女にさせるかもしれないからです。それだけではありません。例えばそれがなかったとしても別の経緯でなるかもしれません。

やっぱりなんと言ってもあの魔法に必要な要素が多いと言うのが最大の要因なのでしょう。実際にそういった人ほど最終的になつてしまつと言うのがほとんどです。稀にそうじゃないこともありますがそれでも関わりを持つ、あるいは持ったことが1つは必ずあるようになりますからね。

と言う訳で今回はなのは魔法の才能を根こそぎ奪ってやることにします。あ、勘違いしないように言っておきますが、あくまでこれは言葉の比喻なので実際に乱暴なことを一切しません。と言うか、もししてしまつたらなじみさんあたりにトラウマものを植え付けられつつ口実を作られてしまいます。そんなのは勘弁願いたいです。いくら私でも何もなかったではすみませんから。

とか考えているうちに実はもう着いていたりします。どこ？って言えば知っている人は知っているなのはの家でもある翠屋です。

ただ、はつきり言ってしまうと実はもう終わっていたりするんですよ。何が？と言いますと先ほど言いました魔法の才能を奪うことですよ。

え？いつしたの？と言うか、そんなことできるの？と思う人もいるかと思います。実はまだ言っていないんですけど私が世界の設定を変えることをたやすく行うことができるなんて芸道ができるんですよ。

なんだそのチート能力wwwwwwなら前回のあれは何だったんだwwwwwwとか思う人は作者に言ってください。だいたいと言っていていいほどの原因は作者にありますので。

ただ、まあ理由としましてはその方が実感があって面白く感じることもができるなあって言った感じです。

だって、皆さんだっていつも行われる戦闘があっさり終わってしまふとかだったら面白くありませんよね？そんなことがないように私はしているのです。と言うより、しないとこの小説は何がしたいのかわからなくなってしまう。いや、もうこんなことを言っている時点で終わっているかもしれません。

はっ！と言うことはもうこの小説は終わったのか。よかった、前回心配していたけどそんなことをこれから気にする必要はなくなつて。

と言う訳でこの小説は今回を持って終わりになります。今までご愛読ありがとうございました。

終わり。

「おいおい、せつかく来てみたらもう終わりだなんていくらなんでも酷すぎじゃないか」

そんな声が後ろから聞こえてきました。そして、振り返ってみたらそこにいたのは本来ならいないはずの人がいました。これが示す答えは1つ！

「ぎゃーおばけだー。ごめんなさいもうしませんからあの世に帰って下さい。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「君はいつから仏教徒になったんだい。それと死んでもいないし僕がどこにでも現れることができるのは君がよく知っているだろう」

「知っていますよそんなこと。ただなんとなく言うただけです」

「うん、これは言うまでもなく死刑だね」

「酷い！？何気に酷過ぎますよなじみさん！」

「と言うのは冗談さ。いくら僕でも大した理由もなしに死刑判決をするわけじゃないよ」

「と言うことは理由があればしていたんですね。おお、怖い怖い」

「いまから死刑になりたい？」

「ごめんなさい。もうしませんと思いますから許してください」

「だが断る」

「なじみさんの顔は1度までだった！！って、言っているそばからギヤ——！！！！！！」

（3分後）

「ちょうどカップラーメンができる時間ですね。そう言えばム○カ大佐も3分間待ってやるっていつてましたね。もしかしてあの人力ツブ麺でも食べたかったのでしょうか」

「もしそうだったらある意味すごいよ。と言うか、それ以前にあの世界にカップ麺はないよ、当たり前だけど」

「本当ですか？でも、もしかしたらあったかもしれませんよ。平行世界に」

「そんなことを言ったらすべての事柄が当てはまってしまうじゃないか。それをわかってて言っているのかい君？」

「もちのろんに決まっているじゃないですか！！」

「死刑」

「理不尽すぎる！？」

「と言うのは冗談さ。いくらなんでもこんな街中でやるほど僕は馬鹿じゃないさ」

「とか言っていますけど、さっき思いつきりやっていますでしたか。見ていた人は全員記憶が抜かれているのでわかってはいませんが少なくとも私10回以上殺されているんですけど」

「正確には4925兆9165億2611万0643回だよ」

「10回どころか千すら軽く超えてたー！？しかも、たぶんだけど過^{マイナス}負荷のスキルの数だこれー！」

「よくわかったね。でも、惜しいね。正確には今僕が持っている過^{マイナス}負荷のスキルの数だよ」

「どっちにしろあっているじゃないですか」

「いやいや、前回君と会ったときは4925兆9165億2611万0644個だったんだから違うよ」

「え？また誰かにあげたんですか？」

「そ。今回は球磨川君と言う子にね」

「へえ、そうなんですか」

「おや？あまり興味がなさそうだね」

「別に持ったとしても私が変わると言う訳でもありませんしね」

「ま、確かにそうだね。ところで、ずるずるとこんな会話が続いていくけど話を進めなくていいのかい？」

「おっと、そうでしたね。でも、戻る前になじみさんに言うておきたいことが1つあります」

「何だい？言いたいことがあれば何でも言うてごらん」

「そうですか、それでは言いますね。」

私を馬鹿にしているのかお前」

「いくらなんでもあれが嘘だつてことぐらい私でもわかるわ。お前が貸したスキルは『ハンドレット・ガントレット手のひら孵し』だつてのもわかつてる。そしてそれは過負荷マイナスではないはずだ。なぜならあれは因果を逆流するスキルでとてもじゃないが過負荷マイナスとは言えるものじゃないからだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりばれちゃったか。まったくそういったところは相変わらずだね。まあ、それが君と言う存在なんだけどね。それと、その馬鹿にしていると云う言葉そのままにして返すよ。はつきり言つてそのキャラ似合わないから」

「・・・・・・やっぱりわかつちやいますか。はあ、やっぱり怒りの感情がうまく出せないのかな私」

「いやいや、そんなことはないぜ。むしろよくできていたよ。そしてとてもキモかったよ」

「さりげなくひどいと言いますねなじみさん！！私は何気に気にしていたことを言うなんてひどいじゃないですか！！」

「それならそれでいいじゃないか。気にしていたんなら言われるべきだろう。それに事実を言ったまでだよ僕は」

「反論したら当たり前だと言つべき正論が帰ってきた！！・・・・・・もう泣いていいですか？」

「それならこの小説を終わらせてからにしてね」

「さっきより言葉がひどくなってるー！！それってこの小説を終わらせるまで泣けないってことじゃないですか！？？」

「後、少なくとも１００話は続けさせること。もし１００話までいかなかったら一生僕の奴隷として存在すること」

「うわあああああ……！……今回の話で終わらせればいいんじゃないかな？と思った傍から釘刺されたあああああ……！！しかも、いかなかった時の条件が酷過ぎる——！！」

「と言う訳でこの小説はここで終わるよ。今まで読んでもらってありがとね。それじゃまたどこかで会おうね。その時は『フラスコ計画』に参加してもらえとうれしいな。ま、ただの人間には興味はねえけどな」

終わり

「終わらせてたまるかあああああああああ！！！！！！！！」

「……ちっ。あともう少しだったのに（ボソッ）」

「怖い！ なじみさん何気に怖いよ！！ いったいいつからそうなったの！？」

「初めっから」

「嘘だ！」

「レナかい君は？」

「せめて伏線ぐらいはしようよ!？」

「はいはい、わかったからその僕っこみたいな口調はやめてね。正直キモイから。後、いつになったら話を進める気だい。読者の皆はもうこれでもかと言うほどイライラしているよ。」

「……………そう言われると返す言葉もないです。えー読者の皆さん本当に申し訳ありません。と言う訳でまずは現状確認に移ろうかと思います。と言っても、もうすでにわかつている方がいるかと思いますが現在私の前に安心院なじみさんがいます。そして、時が止まっています。原因はなじみさんです。さっき記憶がどうたらこうたらと言ったかと思いますが別にそんなことはありませんでした。場所はさきほどの場所と変わっていません。以上、現状確認を終了します」

「いつから君は語り口になったんだい。はっきり言って傍から見ると1人でぶつぶつ言っている変な人に見えるよ」

「……………はは、そう言われても反論できませんね。でも、これぐらいでは挫けませんよ。伊達に私なんですから。それと、話は変わってしまいましたが恐らく読者の皆さんも思っていることを聞いてもいいですか？」

「別に構わないよ。どうせ『なんで僕がここにいるのか？』ってとこだろ。ま、言ってしまうえば今向こうでやるのが特になくてさ、暇だからこっちに来てみたんだよ」

「……人が言うことを先に言うなんてひどいとは思いませんかなじみさん？」

「思つかもね。で、話は聞いたんだけど君この世界に来る前に神を殺したんだって？」

「ええ、そうですがそれが何か？まさかやってはいけなかったとか言うんじゃないですよ。まあ、それでも別に構いませんけどね」

「いや、別にそんなことはないよ。ただ、君が本来なら死の概念がないはずの神を殺したって言うんだからどんな理由があつたのかなと気になったからさ。それでどうしてそんなことをしたんだい？」

「うーん、そうですね。一言で言ってしまうえばイラツと来たからでしょうか。相手の実力量れないのに自分がすべてを握っているっていう感じが好かなかったんですよ。あ、ちなみに1つ言っておきますがあくまでそういうのが嫌いな私だったからそうしただけですから」

「そんなの言われなくてもわかってるよ。それとも、僕を馬鹿にでもしているのかい？……ふーん、やっぱそんなところだったんだね。何だか期待通り過ぎて少しガツカリかな」

「そう言われても私はどうとも思いませんし、思いもします。それでまさかとは思いますがそれだけではありませんよね？」

「まあね。これは実際に見ていたからわかってるけど君はこの世界を変えようとしているんだろ？正確にはあるアニメの物語をね。できればその理由も聞いてみたいんだけど」

「理由ですか。これも一言で言ってしまうはその方が面白うそうだと思いますですよ。第一原作なんてそう思っただ多数の存在に認めてもらえれば簡単にできてしまいますしね」

「・・・・・・まったく、君という存在は本当に飽きないね。普通そんなことを正気で言う奴なんて少数しかいないけどそれを実現できる奴なんて僕が知っている限りでは君しかいないよ」

「え？そうなんですか？私が知っている限りでは結構いましたけど」

「ふふ、やっぱり君はそう言うんだね。そして、そのことに対して嘘だとは僕は思わないよ。それが君と言う存在なんだしね。だからこそ、協力してもらいたいと思っではいるんだけどね」

「フラスコ計画にですか？うん、気が向いたらやるかもしれまんね。と言うか、もうすでに協力しているとも言えるはずなんですが」

「いや、僕はあくまで今日の前にいる『君』に頼んでいるんだよ。他の『君』に頼んでいるんじゃない」

「……………本当に飽きませんねなじみさん。どうしてそこまで『私』に拘るんですか？別に他の『私』でもいいんじゃないんですか？」

「それじゃ駄目なんだよ。あくまで『君』本人いや、全存有無と言う存在に協力してもらわないと意味がないんだよ」

「……………そうですか。ですが、お断りしません」

「そうかい……………ってしないのかい」

「ええ。ただ、するとも限りませんよ。もしかしたら協力したくないと思うかもしれませんし。現時点ではとりあえずしたくはないですね」

「結局どっちにしろお断りと言うことだね。まあ、別にいいさ。可能性はゼロじゃないだけでもまだましだしね」

「そうですね。ところで、なじみさん。肝心なことを聞くのを忘れていました」

「何だい？」

「見ていたと言っのなら恐らく全部見ていたかと思いますが、それならどうしてここに来たんですか？まさか、ただおしゃべりトークをするために来たわけじゃありませんよね。あ、そんなことをする人でもありましたねなじみさんは。これは失礼しました」

「否定できないのが痛いところだね。まあ、確かにおしゃべりトークをするために来たわけじゃないさ。さっきも言ったと思うけど僕も今暇だね。それでその暇を潰すと言うことで君に協力と言うより共同戦線を組もうかなと思って」

「いいですよ」

「・・・いくらなんでも早すぎやしないか？少しは考えてみたらどうだい。この僕がそんなことを本気でするとは思わない、とかさ」

「別に思ったところでどうとでもなるわけじゃありませんし、それに」

「それに？」

「例えなじみさんでも今回のことを邪魔してら容赦なく消しますからね」

「………そんなことが言うのも実現できるのも知っている限りでは君だけだよ」

「私が知る限りでは結構いますけど？」

「ふふ、そうだね。ま、と言う訳でよろしく頼むよ全存君」

「ええ、こちらこそよろしくなじみさん」

そう言っ、互いに握手をしました。

何だか後半が会話ばかりになってしまったね。この際だから言っ
てしまいますけど、なじみさんと話をしようとする大抵このよう
な形になってしまいます。なので、これから先もこんなことが起き
るかもしれませんのでご了承してください。

………あれ？今回のお話はこれでいいのでしょうか

？何だかこの世界とは関係ない話になっていた気がするんですけど。
まあ、別にいいですか。

さて、そんなわけで次回のお話は『謎の魔法少女現る！！そしてな
じみさんがボケた』ということのでいきたいと思います。ちなみに、
このお話になる確率は今のところ100%です。

なので、期待しないで待っててくださいね。できれば期待しても
らっても構いませんよ？もしかしたら当たるかもしれませんので。

それでは次回にまたお会いしましょう。いつになるかはわかりませ
んけど。

目的とは何だと思えますか？

はい、皆さんこんにちは、もしくはこんばんは全存有無です。

え？冒頭の入り方が前回と一緒にですって？ええ、そうですがそれが何か？だって、毎回同じような入り方なら皆さんも安定感があるじゃないですか。それに、その回ごとに違うと何だか調子が出ないんですよ私。

と言うことで、これからこんな調子でいきたいと思います。もしそれが嫌だと思う人は我慢してこの先の展開を読んでみてください。鬼畜w？いったいどこに鬼畜の要素があるのか教えてもらいたいんですが。

まあ、そんなことは永久に置いて早速ですが前回までのあらすじといきます。あ、これも同じように続けていきますのでご了承ください。

ちょっとした暇つぶしと言う名の作者の強制的行動によってリリカルなのはの世界に来てしまった私は原作じゃない展開にすべく行動を開始。その手始めにユーノの傷を完治し、少し記憶をいじりました。その際にこの世界に50人ほどいる転生者のうちの5人から襲撃されるも逆にコテンパンに返り討ちにしました。そして、（

この世界に来てから、2日目に様子見をし、3日目になのはの魔法に対する才能を根こそぎ奪うよう行動を開始。結果、成功したがその際になじみさんとまさかの再開。そしてなんだかんだでしばらくの間共同で行動することになりました。

以上、前回までのあらすじでした。

……あれ？なんか行数増えてる？いや、増えるのは当たり前だとは思いますが、いくらなんでもここまで増えるとは思っていませんでした。うーん、これはあらすじの紹介の仕方を考える必要がありますね。

さて、振り返るのはここまでにして、今日すべきことを確認します。

今日は、いよいよ第2の主人公兼ヒロインと言えるんじゃないのかと思われるフェイトとの邂逅をします。

『もうそこまで進んだの？』『あの樹とかの話はどうなったの？』と思う方もいるでしょう。まず前者の答えですが、ええもうそこまですんでいます。後者に関しましてはぶっちゃけユーノが封印を終わらせたと言っことになっています。もちろんそうなるように私が仕組みましたが。

と言う訳で早速事が起こるであろう現場に行きたいなと思います。

とか言っている前にもうすでに着いています。ハハハ、びっくりしましたか。前回では考えている途中で着いたことになっていましたから今回は始まる前に着くことにしたんですよ。どうです？すごいでしょう？

「わーすごいすごい（棒）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・しくしく、私の心がかなりえぐれてしまいました。悲しいったらありやしません」

「だったら考えなかったらいいじゃないか」

「普通そこは言わなきゃよかったって言うべきじゃありませんか？
と言うか、人の考えを読んでなきゃ言えませんよそんなこと」

「何当たり前のことを言っているんだ君は。そして、僕たちはいつ
たいいつまでこんなことをしていればいいんだい」

呆れとも疲労しているとも感じる事ができる台詞でした。

と言うことで、なじみさんと皆さんの疑問にお答えしようかと思
います。恐らく皆さんも私たちが今何をしているのか不思議に思っ
ていますよね？

実は私たちは今大きくなった子猫の背中にいます。正確には座っ
ていると言えいいでしょう。

何故こんなところにいるのかと言いますと、はつきりいつてなん
となく背中に乗ってみたいなと思ったからです。だって、猫の背
中に乗れるんですよ？普通ならこんな機会はありませんよ。

てなわけで、猫の背中に乗ったと言うことなんです。で、せっか
くだからここで待機しようと思い、フェイトが来るまで待っていると
言う訳なんです。これでわかりましたか？

「ようするに君の願望を叶えた結果こうなった、ということを受け
取っていいんだね」

「まあ、そんなところですかね」

「うん、死刑」

「またですか！？何で前回もそうでしたがそんなに私に対して死刑

判決を下すんですか！？いつからそんな性格になったんですか
なじみさん！？」

「始めっから」

「う「嘘だっ！！」 台詞を取られたあああ！！」

「だって、まるっきりこのまえと同じ展開じゃないか。だからそんなことがないように僕が言ったんだよ。むしろ感謝してほしいよ」

「何故に！？と言ったただ言う人が変わっただけじゃないですか！！」

「そんなことは知らないなあ」

「酷い！！このなじみさん前回に続いて酷過ぎるよ！！」

「……………さて、からかつのはここまでにしといて」

「いやいや、明らかに嘘だってわかりますよそれ」

「こ・こ・ま・で・に・し・と・い・て。どうやらもつそろそろ来るね」

「・・・・・・・・・・そのようです。でも今はどちらかと言つとなじみさんに興味があるんですけど」

「その発言いろんな意味で危ないよ。主にセクハラ方面で」

「誤解があつたようで謝りますけど、そういう意味じゃないですか。・・・・・・・・・・なじみさんってそんな性格でしたっけ？」

「その質問プロローグの時にも言わなかったかい？そしてその答えもその時に言つたはずだよ」

「いや、それは知っていますけど、何だかこう調子が狂うと言いますか慣れないんですよ」

「それはしょうがないよ。でも、どちらかと言つと君の方が原因だったりするんだぜ」

「私が？」

「そ、君が。正確に言うと君のその対応の仕方かな。何と云うかついいじりたくなってしまっただよね見ていると」

「・・・・・・それって所謂Sってやつじゃありませんか？」

「そうだね。ま、でも別に珍しいってほどでもないだろ。現に人は誰かのことをいいじりたいと思っっていたりするんだから」

「それって、確か誰かにかまって欲しいと言う願望の裏返しじゃありませんでしたっ」

け、と言おうとした瞬間に地面、あ、間違えた、猫が大きく横に揺れ、いや、倒れこみました。当然、その背中にいた私たちも巻き込まれました。

が、案の定と言いますかすでにそんなことになるとはわかっていましたのでなんともなかったかのように私たちは地面に着地しました。

さて、ここで恒例？の現状確認といきましょう。

木の上に立っている女の子が1人、使い魔らしきものが1人、隣に同じように立っている男の子が2人、この場を囲むかのようにいる

男の子が15人、上空に女の子2人男の子1人、そして私たちの横に倒れている猫が1匹、さらにその近くにいる男の子が1人。

以上、現状確認終了。

・・・・・・
「い？なんですかこれ？何でこんなに人がいるんですか？たぶんと言うか間違いなくほとんどの人は転生者だと思いますが何でこんなに集結しているんですか？もしかしてそう言う決まりとかあったんですか？」

「そうかもしれないね。もしくはただ単に考えていたことが皆同じだったのかもしれないね」

何それすごい。ある意味すごい。何も言わなくてもわかるんだから本当にすごい。異体同心とはこのことを言うんですね」

「まあ、そうだね。で、どうするんだいこの状況。まさかこのまま何もしないわけじゃないだろ」

「ふふ、やっぱりわかつちやいますか。ええこの状況こそまさに私が待ち望んでいた状況です。そう、バトル展開ですよー！」

「本音は？」

「その方が読者の皆さんも燃えるんじゃないのかなあと作者が考えたのでそれを実行するはめになっただけです」

「だと思ったよ。言っちゃんだけど君はバトルマニアな性格じゃないしね」

「当たり前じゃないですか。特にイライラしているか腹が立った相手にはバトルする時もありますが基本それ以外は避けているんですよ私は」

「自分の身が危ない時もかい？」

「……なじみさん、それわかって言ってますよね？私の危ない時は常にあるともないとも言えるって前にも言ったでしょう？」

「ああ知っているよ。でもさ、僕は知ってても読者の皆は知らないじゃん。だから面倒でもわざわざ聞いてやったんだから感謝の1つや2つは欲しいもんだぜ」

「ちなみに誰に向かって言っているんですかそれ？」

「作者」

「やっぱりそうでしたかー。さて、雑談はここまでにしといて本題に戻りましょうか」

「そうだね。で、まずは何をするんだい？」

「そうですねえ。じゃあこの前と同じように原作のキャラをこの場から退場させましょう」

「ええー。いくらなんでもそれは安直すぎるだろ。もっと他にあるだろ？この状態のまま戦ったり、トラウマものになるぐらいの戦闘にしたりといろいろあるだろ」

「とりあえずなぜそれらが真っ先に出たのかについては突っ込まないことにします。でも、これにはある訳があるんですよ」

「へえー。いったいどんな訳だい？」

「ぶっちゃけ作者が考えるのがめんどくさくなったからこんな風になった」

「よし、今から消しに行こう」

「ええ、是非行きましょう！！と言いたところですがそれはこの場を終えてからにしないといけませんよ。だって、このまま行ってしまうと何のためにこの舞台が整えられたのかわかりませんからね」

「それもそうだね。じゃ、早速やろうか」

「と言う訳であなたたちはこの場から退場させますね」

そう言うって私は原作のキャラを強制的に退場させました。あ、勘違いしないでくださいね？あくまでこの場からいなくなったただけで消したわけでも殺したわけでもありませんから。

それを見て周りの人達は騒ぎ始めました。

「おい、俺のフェイトはどこ行っただんだ！」「浮獣もどこに行きやがった！」「あの2人の仕業か！？」「あれ？今気づいたんだがあの2人の片方安心院なじみじゃね？」「あ、確かに言われてみればそうかも」「じゃあ、もう1人の方も原作キャラか？」「でも、あんなやつめだかボックスには出てなかったぞ？」

「いつの間に有名になったんですかなじみさん？またなんかやらかしたんですか？」

「いや、僕は何もしていないと言いたところだけど心当たりがないとも言切れないね。でも、恐らくそんなのとは関係ないのかもしれないね」

「と、言いますと？」

「彼らから聞こえた中に『原作キャラ』と言うのが聞こえた。たぶん、僕もなんらかの作品のキャラクターとして出ているんだと思う。でも、そこまで僕は有名なのかな？言ってしまうえば僕は主人公ポジションじゃないんと思うんだけど」

「いや、有名になっても別におかしくはないと思いますよ。だって、なじみさんて主人公じゃなくてもキャラが濃いですしね」

「そうかな？」

「そうですよ。っと、まあこんな会話は今はどうでもいいとしてもうぱっぱらーと進ませますよ。正直だったらいつまだたっても物語が進まないのはイライラします」

「それじゃ、こんな会話はこの辺にしといて行動を開始しようか。ちよと僕もそんなことを考えていたしね」

「じゃ、いち、にの、さんで行きますか？」

「嫌だ」

「ちよ、おま」

と私が言い終えないうちに周りを囲んでいた15人を一瞬で蹴散らしていました。正確には気絶させていました。

そして、それを見た私も負けじとまだ残っている転生者を倒すことにしました。

まずは木の上に立っている2人を言葉を発する前に胴体を真つ二つに引き裂いてあげました。2人は何が起こったのかわからない表情をしていました。

次に上空にいる3人の背後に移動しました。最初は男の子の体全体を『ミンチにした』と言う、残り女の子2人は『心臓を握りつぶした』と言う結果にしました。

するとどうでしょう？男の子は見る影もない血の塊になり、女の子は苦渋の表情を歪めながら地面に落ちてそのままピクリとも動かなかったではありませんか。

それにしても、この3人は他の人と何か違ったような気がしたんですが別にどうでもいいですね。

「いやいや、それは何気に重要なことだよ。もしかしたら他の転生者の暴走を止めるために頑張っていた転生者かもしれないんだからさ。それと、君はいちいち人を殺さないと気が済まない主義なのかい？正直見ていてあまりいいものじゃないよこれ」

「別になんだっていいじゃないですか。まあ、確かにいいものじゃないって自覚はありますがそれでもなんとなく気分ですべてしまいう時もあるんですよ私は。それに例えこの転生者がそんな人物だったとしても私には関係ありませんよ」

「そうかい。ま、僕も正直どうでもいいんだけどね。別に暇つぶしとしてやっているだけだし、それにそこまで興味を持つような存在じゃなかったからね彼らは」

「そうなんですか？見たところそれなりの力を持っていた気がしたんですけど」

「だとしても、あまり興味が無いことには変わらないよ。だって、彼らはただ力を持っただけの存在なんだからさ。まあ、確かにそれはそれで興味があるけど、それほど持つものでもないし、何よりフランスコ計画になんらかしらの影響を持つわけでもないしね」

「やっぱりそんなところでしたか。まあ、それがなじみさんのなじみさんたる由縁なんですけどね。ちなみにそんななじみさんに1つ質問してもいいですか？」

「何だい？ 答えられる範囲でなら構わないよ。答えられないものでも別に構わないけど」

「それじゃ言いますね。なじみさんは目的とは何だと思えますか？」

「それは言葉の意味を聞いているのかい？ それとも個人的な考えの方を聞いているのかい？」

「もちろん後者の方です。で、結局のところどうなんですか？」

「そうだね、僕個人としての考えで言うと『その人その人がめざし、達成するもの。あるいは達成できなくても可能な限り果たそうとするもの』かな。でも、なんでそんなことを今聞くんない？ 僕として

はそっちの方が気になるな」

「別にこれと言った意味はないと言えば嘘になりますね。あるとすればさきほどなじみさんが言っていたこの転生者がやっていたことに少し疑問に思ったところですかね」

「へえ。ちなみに何で疑問に思っただい？」

「この転生者は何の目的があってそんなことをしていたのかと思っただんですよ。まあ、恐らくそれがいいことだと思っていたのかただ単に見ていて腹がたってやっていたのかもしれないけどね。でも、そんなときふと思ってしまったんです」

「『目的とはなんなのか』って？」

「ええ。確かになじみさんがさっき言った通りなのかもしれませんが。しかし、その目的自体はどうやって生まれたのか？自分が考えて出した答えと言えは納得できるかもしれないませんが、その考えや答えはどうやって生まれたのか、またどうしてそうなったのか、とってしまったんです」

「……１つ言っておくぜ、それはあらゆる存在を否定しているのと同じことだぜ。第一感がると思っっている時点で答えなんてでるわけないだろ」

「まあ、そうですね。でも、どうしてもそう思ってしまう時があるんですよ。だって、

『私』ですから

「……………じゃ、さっさと今回の話を終わらせるか」

「まさかのスルー！？」

「と言うわけで次回もよろしくね。ま、いつになるかなんてわからねえけどな」

「そして、出番も取られた！！このなじみさん怖すぎるよ！！」

「ソナコトハナイヨ？」

「何故に片言！？って、まさか本当にこれで今回は終わり！？ちょっとそれはな」

強制終了

戦えればそれで十分

はい、みなさんこんにちは、もしくはこんばんは全存有無です。

あらずじはめんどくさいのでカットします。

え？いくらなんでもそれはないって？正直めんどくさく感じたんです。と言つか、作者もようやくこの時点でそのことに気付いたようでこのようなことになったんです。まったく、本当に駄目な作者です。略してマダサ。これ流行るかな？

さて、と言う訳で早速本編に入ろうかなと思います。って、これも一応本編でしたね。失礼しました。

で、早速でなんですが実は1つある問題が発生しています。

それはですね、前回私となじみさんが協力？して倒したあの転生者なんです、どうやらあの後、何者かに殺されてしまったようです。しかも、全員。

え？その内5人はお前がすでに殺ったんだろうって？まあ、確かにそうですが、あの後前と同じように復活させたんですよ。その際、

ちょっとしたおまけで力を多少ですが増大させました。

それでも、殺されてしまったんです。おかげで今世間で騒がれているんです。

そうです、死体が放置したままだったんです。だからニュースで話題になるぐらいの騒ぎになったと言う訳です。まあ、確かに死体と同じ場所にたくさん見つければそりゃ話題にならないのはおかしいですね。あ、ちなみに1つ言っておきますが、どうやら見つかった場所はこの前私たちが戦った場所ではありませんでした。そのこともニュースで知りました。

しかし、これはこれで大変気になります。だって、この殺されたのがどうやら昨日らしいんですよ。それが何を意味するのかと言いますと、前回と言うのは実は昨日のことなんです。

そっちの時間軸はどうなっているのかはわかりませんが、こっちでは前回と今回の間は1日しかありません。

つまり、昨日私たちが去った後に彼らは一人残らず殺されたと言うことになります。

それはそれで何気にホラーな気もしますが私が気になっているのはその殺した者がいったい誰なのかについてなんですよ。

え？複数犯じゃないのかって？確かにニュースでも複数犯による殺人と言っていますが、私が思うにこれは単独犯によるものだと考えているのです。

その根拠ははっきり言って勘、ではありません。能力を使って調べてわかっただけです。

そう、実はもう犯人は誰なのかわかったりします。と言う訳で、

「犯人確保に向かいますよなじみさん！」

「だか断る」

・・・な・・・・・・・・ん・・だと・・・

「どうして僕がそんなことに付き合わなきゃいけないのさ。理由もないし、あっても逝きたくない」

「どうして死ぬことが決まっているんですか！？そう思ったら怖くなっただじゃないですか！！」

「じゃ行かないことでOK?」

「OKじゃない!! って、考えてみたら私もなじみさんも例え死んだとしても平気じゃないですか」

「だとしても逝きたくないね。それにまさか君はこんなか弱い少女の死にさまでもみたいのかい?」

「自分でか弱いつてどうなんで・・・すみません、お願いですからそのどう見ても不釣り合いな斧を締まってください」

「嫌だ、と言ったらどうする?」

「もちろん逃げます」

「そっか、それは残念だね。と言っわけじゃあね」

「結局やるんですか!! って危な!! 死ななくても危ないですよこれ!!」

「・・・っち、避けやがって。次は外さないから覚悟してね」

「毎回と言うよりこの前から思っていたことですけどそんな性格でしたっけなじみさん!？」

「さあ、どうだろうね。と言うことでもいい？」

「全然よくないです!!--と言うことで逃げます!!--」

そう言っ、全力でその場から逃げました。

（10分後）

「・・・あれ？おかしいですねなじみさんが追ってきませんかと言って私の周りに来る気配もありません」

どうしたんでしょうかと思っていたその時後ろにただならぬ気配を感じました。

・・・え？嘘でしょ？いくらなんでも早くない？確かに今私がいるところは人気がない無人のビルの中ですけどいくらなんでもベタすぎますよ？

そんな私の思いとは裏腹にその気配はだんだんと強くなっています。

さて、ここで私が取るべき行動は………！

「だーるまさんがころん、だ！！」

と私が振り向いたらビタツと何かが止まりました。ちょっと暗くて見えずらいので見やすいように認識します。

そして、何かの全体像がはっきりと見えてきました。ってあれ？

「何だ、誰かと思えばあなたですか鋸さん」

「あれ？誰だと思ったらお前か全存」

「そうですよ。はあ、びっくりして損した気分です」

「それはこっちの台詞だ。せっかく殺り合える相手かなと思って期待して近づいていたのにお前だとわかったらやる気が下がったじゃないか」

「それは何だか悪かったですね。でも、どちらかと言うと鋸さんの方が悪い気がしますね。だって、そんな好戦的な性格を持っているんですから」

「そんなこと言われて、『はい、そうですか。じゃ、おとなしくします』なんて俺がすると思うか？」

「しないですね。ところで何でこんな世界（ミカ）にいるんですか？」

「ん？ああ、何たいしたことではないさ。ただ単に世界を移動したら着いたのがここだったただけだ」

「ああ、やっぱりそんなとこでしたか。ちなみに1つ聞きますけどいつここに着いたんですか？」

「昨日だな。あ、そうそう昨日と言えばさあなんか変な奴らと会ったんだよ」

「変な奴ら？」

「そう。本来ならたいした力を持ちそうもないのに結構持っていたんだよなそいつら。で、そんなだから楽しめるのかなと思ってい

「たんだが案外そうでもなかったからがつがりしたんだよ。それにしてもあいつら何だったんだろうな？なんかあいつらみたいな存在どこかで見たことがあるような気がするんだよなあ」

「その人たちは転生者ですよ鋸さん」

「ああ！それだそれ。いや〜どつかで似たようなのいたな〜と思っていたけどそうだよ転生者だよ。あれ？じゃあ何であんなに同じ場所にいたんだ？言っちゃなんだけどあいつら協調性がないやつがほとんどだぞ」

「あ〜、それはですね」

「〜前回までのことを解説中〜」

「・・・・・・へえ〜そんなことがあったのか。と言うか、昨日あれニュースになっていたんだな」

「なってますよ、思いつきり。しかも怪奇事件扱いされていますよ」

「そうなのか？あ〜失敗したなあ。死体隠蔽でもすればよかったかなあ。ま、別にいいか」

ズルッ

と、思わずズッコケました。

「いいんですかい」

「ああ。だって、今更そんなことを気にしても意味ないしな」

「ああ、そうでしたね。あなたはそんな性格でしたね。だからこそあなたはある意味厄介なんですが」

「それに関しては流石に自覚はしている。ところで、その転生者だが他にもまだいるのか？」

「ええ、いますよ。今確認できるのは20人ぐらいですね」

「ん？俺がやったのは20人だから後30人残っているだろ？」

「内5人は戦闘行為の意志がもうありませんし、もう一方の5人は他の転生者にやられたそうです」

「所謂同士討ちってやつか。ま、俺には関係のないことだな。で、早速ものは頼み何だが」

「その他の転生者を俺に殺らせろっていうんでしょ。別に構いませんよ。でも、期待通りの強さは持ってはいませんが」

「それでも構わねえよ。もしかしたら1人や2人骨のあるやつがいるかもしれねえしな」

「もう一度、それも詳しく言いますね。あなたの期待通りの心の強さと力の強さはもっていないと言っているんです」

「・・・・・・・・マジで？」

「マジで」

私がそう言つと鋸さんはorzになりました。

「ばんなそばな・・・！」

「何故に上田？」

「俺は何のためにここに来たって言うんだ……！」

「しかもスルーですか」

「……はあ、今は特にすることもないからその残った転生者は俺が殺るか。でも、あんまやる気がしねえな」

「じゃやんなきゃいいじゃないですか」

「だーから、やることが今特にないって言ってんだよ……！」

そう切れたかと思ったたらまた落ち込み始めましたよ。

なんだかんだ言ってこの人言ったこと（戦闘関連限定だが）をやり返げようとするからねえ。だから、何気に感謝はしているんですけどね。

しかし、このままだと何だかわいそうですししょうがないですから少し勇気づけますか。

「鋸さん。そこまで言うなら私がお応えにあうようにしましょうか？」

「……あゝいや、いい。それはそれで何だかやる気がなくしそうですし」

「じゃ、1人だけ限定でオーバーチート能力にするとかならどうですか？それも人格を戦闘向きにして」

「んゝ、じゃそれなら別にいいや。何だかんだ言っても別に俺が楽しめればいいし」

と言う訳承諾ももらったわけですし、早速やるとしましょう。

………

はい、終わりました。描写がない？じゃあ、どうやって書けって言うんですか？それに私自身も特にこれといったことはしていませんし。ただそうなるようにいじっただけですしね。

「終わりましたよ鋸さん」

「ん？ああ、ありがとな全存。ところで唐突だがもう1つお願いがあるんだが」

「何ですか？」

「ああ、実は……」

「・・・と言うことでこれから少しの間ですが一緒になる鋸のこぎり 槍やりさんです。よろしいですねなじみさん？」

「何もよくないよ。と言うか君がここからいなくなってから戻ってくるまでの10数分間の間何があったんだい？むしろそっちの方が気になるんだけど」

「逃げる↓鋸さんとまさかの再開↓いろいろと雑談をする↓一緒に行く？↓行く！↓現在にいたると言う訳です。わかりましたか？」

「全然わからないね。むしろそれでわかるものでもないだろ」

「そう言われると返す言葉ありません」

「なあ、俺はどこで寝ればいいんだ？」

「その辺で寝てください。ああ、何だったら公園の芝の上でも構いませんよ」

「ああ、そう」

「って、君はそれでいいのかい？」

「別に構わないな。俺としては戦えればそれで十分だし」

「……………今僕はどうして君がこいつと関係を持っているのか不思議なんだけど？」

「……………え？なじみさん何言っているんですか？そんなのなじみさんがよくご存じのことですよ？」

「？何のことだい？」

「あれ？……………もしかして、このなじみさんは」

「どうしたんだい全存君？」

「いや、なんでもないです」

と、言ったものの正直少し動揺したりします。まあ、その理由に関してはいずれ話すとしましよう。

と言う訳で、今回はここまでです。え？強引すぎる？別にいいじゃないですか。むしろわからない部分がある方が面白いと言うでしょ。まあ、本当は作者が（察してください）

では次回にまたお会いしましょう。まあ、いつになるかなんてわかりませんが。

ところで、最近思っていたことですがこれなのは世界なんですよ。ね一応？何だか影が薄く感じるんですが。

まあ、いいですか。そもそもここにくるのは乗り気じゃありませんでしたし。

戦えればそれで十分（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1199ba/>

ちょっと自分の欲求を満たすためにあちこちの世界に行ってきます

2012年1月9日21時58分発行